

報 告

滋賀県大津市千丈川における1979年と2009年の魚類相

びわ湖サテライトエリア研究会 中 川 雅 博

びわ湖サテライトエリア研究会 鈴 木 誉 士

Fish fauna in 1979 and 2009 at the Senjyo River, Otsu-shi, Shiga. Masahiro Nakagawa and Takashi Suzuki (*Biwako Satellite-Area Research Group*)

はじめに

生物相の記録を残すことは、環境保全の基礎資料になるため重要であるが、琵琶湖南湖付近の小規模河川での魚類相情報はきわめて少ない。そこで著者らは2009年に滋賀県大津市の千丈川で魚類相調査を行い、30年前の同河川での魚類相と比較を試みたので報告する。

調査地と方法

千丈川は京都府宇治市陀羅谷に源流をもち、大津市千町を流れて瀬田川南郷洗堰上流に注ぐ、流路約4.3kmの河川である。勾配20分の1ほどで、琵琶湖に注ぐ他の河川に比べて急勾配である。

河口から上流に向けて約3 kmは、コンクリートの護岸になっているが、周りに草が生い茂り、河口部以外は、水生昆虫が多く生息する。また、その上流は蛇行しながら流れており比較的自然度の高い状態である。通常の水量であれば川幅は1～5 mである。河口から300 m上流に堰堤があり、本稿ではこの堰を境に上側200 mを「中流」の採集地点、下側200 mを「下流」の採集地点とした。

魚類の採集は調査員1名がタモ網1本を用いて、各地点30分間、移動しながら行った。採集にあたっては、魚類が多く生息するこぶし大の石や川岸に

生える草の周辺を重点的に探索した。この調査は中流・下流ともに2009年1月～12月の1年間、毎月1回実施した。

30年前の魚類相と比較するために、来見・鈴木(1998)の調査結果を先述の堰堤を基準に中流および下流の魚類相に区分し、本調査結果と比較した。

結果と考察

表1に1979年と2009年の魚類の種組成を示す。1979年には中流で7種と下流で9種が確認されていた(来見・鈴木, 1998; ただし, 採集方法は明記されていない)。一方, 2009年には中流で3種と下流で5種のみが確認された。採集されなくなった魚種として, ムギツク, シマドジョウ, アカザなどの在来種が挙げられた。一方, 新たに採集された魚種はカマツカとキンギョであり, 後者は投棄された個体と見られる。採集方法が同じでないため単純な比較はできないものの, 種の多様性の減少傾向が見られる結果となった。

表2に示すように, 2009年時点での千丈川ではカワムツとドンコが多く生息する。一方, ヨシノボリ類の生息数は少ないことが明らかになった。

ヨシノボリ類については, 1974年に比べて1979年には個体数減少の兆しあるとの所感が記されて

表 1. 1979年と2009年の種組成（魚類）.

種 名	学 名	1979年		2009年	
		中流	下流	中流	下流
アユ	<i>Plecoglossus altivelis</i>		○		○
カワムツ	<i>Nipponocypris temminckii</i>	○	○	○	○
オイカワ	<i>Zacco platypus</i>		○		
カマツカ	<i>Pseudogobio esocinus</i>			○	
モツゴ	<i>Pseudorasbora parva</i>		○		
ビワヒガイ ¹⁾	<i>Sarcocheilichthys variegatus microoculus</i>		○		
ムギツク	<i>Pungtungia herzi</i>		○		
ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i>	○	○		
シマドジョウ	<i>Cobitis biwae</i>	○			
ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i>	○	○	○	○
トウヨシノボリ ²⁾	<i>Rhinogobius</i> sp.	○	○		○ ⁴⁾
カワヨシノボリ ³⁾	<i>Rhinogobius flumineus</i>	○			
アカザ	<i>Liobagrus reini</i>	○			
キンギョ	<i>Carassius auratus auratus</i>				○

○は確認されたことを示す.

1) 来見・鈴木（1998）では、単に「ヒガイ」と記されている.

2) 来見・鈴木（1998）では、単に「ヨシノボリ」と記されている.

3) 来見・鈴木（1998）では、河口から約2 kmでのみ採集された.

4) 採集後に直ちに放流しているため、精査するとカワヨシノボリが含まれている可能性がある.

表 2. 2009年の月別の種組成（魚類）.

地点	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	種 名												
中流	ドンコ	3	4	7	5	3	3	2		4	6	5	5
	カワムツ						3	3	1	47	66	18	
	カマツカ						1						
下流	ドンコ	2		2	1	1	2	3	4	1	4	3	1
	カワムツ	9	13	8	7	6	16	34	31	22	11	13	14
	アユ					1	2						
	トウヨシノボリ	2				1					1		
	キンギョ					1							

数字は個体数を示す.

おり（来見・鈴木，1998），原因は特定できないが当時にすでに千丈川でヨシノボリ類が少なくなってきたことがわかっている。また，1980年代前半には河口付近の浚渫や川幅拡張工事が行われ，生物相の変化が懸念されている（井上，1984）。

謝辞

田中大介博士（当時近畿大学大学院農学研究科）には採集を行っていただいた。本調査の一部は関

西自然保護機構研究助成金によった。記して謝意を表します。

引用文献

- 井上 誠. 1984. 千丈川におけるホタルの生息状況. 全国ホタル研究会誌, 17: 10–11.
- 来見誠二・鈴木紀雄. 1998. 千丈川におけるヨシノボリの遡上様式と形態変異. 滋賀大学教育学部紀要 自然科学, 48: 75–87.